

2025 Spring
NO.490

AAR News

「学びの楽しさ」をすべての子たちへ
—AARのインクルーシブ教育支援

カンボジア・カンダール州のタ・アエク小学校の校庭にて。休み時間に楽しそうに遊ぶラザさん（左）とパンニャルット君（右）＝2024年12月

AAR ニュース 2025 春号

p2-5 特集：「学びの楽しさ」をすべての子たちへ — AARのインクルーシブ教育支援

p6 活動レポート：能登半島地震、東日本大震災

p7 活動レポート：ウクライナ国内避難民支援 スタッフ日記：トルコ

p8-9 インタビュー：矢崎 和彦さん（株式会社フェリシモ代表取締役社長）

p10-11 インフォメーション

p12 スタッフ紹介：野際 紗綾子（支援事業部マネージャー）

since
1979
45th
想いを、支援に。



AAR Japan

認定NPO法人 難民を助ける会

特集

障がい者支援

「学びの楽しさ」をすべての子たちへ

—AARのインクルーシブ教育支援

カンボジア

障がい児受け入れの『チェックブック』配付

「パンニャルト君、次どこに行く？」
カンボジア・カンダール州にあるタ・
アエク小学校。休み時間の校庭に、1
年生のラザさん（6歳）の元気な声が
響きました。

「教室の前まで、行こう！」

車いすに乗ったクラスメイトのパン
ニャルト君（7歳）が答えると、ラ
ザさんは「よし、出発！」。その車いす
を押して、2人は教室へ向かいました。

以前は学校に通えず、泣いたことも
あったパンニャルト君。「今は学校で
友達と一緒に勉強ができて嬉しい。（手
にも障がいがあつて）うまく字を書く
のは難しいけど、それでも鉛筆を持つ
て書くのが楽しいよ」と話します。パ
ンニャルト君の担任の先生は彼が
授業についていけるように特別にク
メール語の発音を教えたり、ラザさん

ら友人たちも彼にノートを見せて授業
の内容を教えてあげたりと、和気あい
あいと協力しています。

AARはタ・アエク小学校で、バリ
アフリートイレやスロープの設置、教員
研修や啓発授業などを通じて、インク
ルーシブ教育（IE）の取り組みを支
援しています。加えて、同校では
AARが作成した「IEチェックブッ
ク」を活用し、日々、学校全体でIE
を推進しています。

実践状況と課題を可視化

AARは2013年からカンボジア
で、障がいのある子どもが安心して学校
に通えるよう、IE事業を実施してき
ました。バリアフリーインフラの整備や
教員研修、地域社会での啓発活動などの
豊富な実績を評価され、22年にはカンボ

校庭で遊ぶパンニャルトくんとラザさん（中央）＝カンダール州で2024年12月

すべての子どもが学ぶ権利を持ち、それぞれの可能性を最大限に伸ばせる環境を整えること——これは世界中の教育現場で求められている課題です。長年障がい者支援に取り組んでいるAARは、カンボジアやタジキスタン、パキスタン、ミャンマーなどで、障がいのある子どもたちが安心して学べる環境づくりを支援し、インクルーシブ教育（IE）の推進に取り組んでいます。現地からご報告します。



IE チェックブックの活用方法について学ぶ教員研修
＝カンダール州で 2025 年 1 月

ジア教育省の要請を受け、各校で IE の実践状況を確認し、改善のツールとなる「IE チェックブック」を作成しました。

チェックブックは、全 78 ページのクメール語の冊子で、学校編と教室編があり、それぞれ約 50 個の項目を 4 段階で評価するようになっていきます。学校編では、学校設備のバリアフリー化や、教員の研修経験など、教室編では児童の健康状態や家庭環境、障がいの有無、必要なサポートの種類などを確認できます。掲示物の位置や色づかい、机や椅子の配置などについての項目もあり

ます。チェックブックはこれまで、プノンペン特別市を含む国内全 25 州に 2024 年ある郡教育事務所のうち、194 事務所に配付され、IE 推進に活用されています。

先生たちの意識にも変化

AAR は IE チェックブックの理解を深めるための研修にも取り組んでいます。23 年以降、9 州の 197 校を対象に実施した研修では、チェックブックの活用法について話し合っ発表し、実際に学校環境を評価する実践的なセッションを行いました。研修に参加した小学校教諭のヒート・テアヴィさんは、「子どもたちがみんなが学びやすい教室を実現するため、これまでできていたこと、できていなかったことに気付きました。改善を続けていきたいです」と話していました。ほかに、「特別な対応が必要な子どもが今はいなくても、事前に環境を整えることが大切」といった声が寄せられました。

研修から 1 年後に行った調査では、教育担当の行政職員が、管轄する学校でチェックブックの普及活動を行ったり、各校の管理職が毎月の定例職員会議で配慮が必要な子どもに関する情報を



写真や図を多く配置した IE チェックブック（上）と、主なチェック項目

共有したりしていることが確認できました。教育現場の教室では、理解に時間がかかる子どもに対して、子ども同士で教え合う時間を多く設けているほか、授業中に立ち歩く多動性のある子どもを叱ったり無理に着席させたりせず、周りの児童への配慮や安全を確保した上で自由に行動させるなど、変化が生まれています。

今後、さらに多くの学校で研修を行い、各校がチェックブックを活用しながら IE を進められるようサポートします。障がいの有無にかかわらず、多くの子どもが学び、自らの夢や未来を描けるように、想いを込めて活動に取り組んでいます。

プノンペン事務所
山本啓太



支援が必要な子どもが利用しやすいよう、工夫された配置図に沿って机と椅子が並んでいる



授業内容ごとに、特別な支援が必要な子どもに合わせた教材を用意し、役立てている



特別な支援が必要な子どもを地域で支える保護者や住民のワーキンググループがある



写真やサインなどを使った掲示板を設置し、必要な情報を毎日更新して伝えている



校庭には様々な種類の植物が育ち、木陰があり、各植物の名前がわかりやすく表示されている



支援や配慮が必要な子どもの個別指導計画を策定し、計画に沿って教育が行われている

障がい児教育を担う、未来の教員を育てる



教育実習で子どもを指導する学生
= ヒッサール市で 2024 年 12 月

ルーシブ教育（IE）の普及を後押ししてきました。

IEを推進するには、理論を深く理解し実践できる教員の育成が不可欠です。そこで20年からは、首都ドゥシャンベを含む4市の教員養成大学や専門学校で、教職課程の学生がIEを学べる環境を整備。教授や講師向けに「障がい理解」「IEの基礎」「合理的配慮」などの指導法研修を行ってきました。

教育実習「楽しかった」

24年12月には、トゥルスンダ市の教員養成大学の学生たちがインターンシップ教育を実践するヒッサール市の公立小学校を訪れ、教育実習を行いました。初めて障がいのある子どもたちと関わる学生もいて、最初は緊張した様子でしたが、次第に笑顔で積極的に交流を深めていきました。

授業では、長時間座ってられない児童に合わせてボール遊びを取り入れて気分転換させたり、

視覚的にわかりやすい絵カードを活用したりと、教職課程で学んできた内容を自然と実践する姿が見られました。

実習を終えた学生たちは、「とても楽しかった」「自分の授業づくりを活かしたい」と話し、協力校の担当教員からも「このような機会が増えれば、さらに多くの子どもたちの就学につながる」と高く評価されました。短い時間ながら、実習生たちは終始子どもたちの目線に立ち、温かく楽しい雰囲気の中で寄り添い、実習を終えました。将来、学生たちがどんな先生になるのか、とても楽しみです。

タジキスタンでは、IEの専門的な知識やノウハウを持った指導者がまだ少なく、現場の小中学校でもIEについてしっかり学んだ教員が十分に配置されていないのが実情です。今後、IEをさらに普及させるには、教員養成の段階から学びを深め、現場で実践でき

る教員を育成することが不可欠です。AARの事業に関わった学生や教育者が将来、それぞれの現場でIEを広げていくことを心から願っています。

ドゥシャンベ事務所

高島公美



教育実習で、子どもとボール遊びをする学生
= ヒッサール市で 2024 年 12 月

パキスタン

障がいに応じて点字や手話の授業を実施

パキスタンのハイバルパフトゥンハー州では、2019年から小学校のバリアフリー化や教員研修のほか、学校に通えていない障がい児の家庭訪問や生活相談を行ってきました。これまで23校で、84人の障がい児が新たに就学しています。AARは、就学した障がい児の

必要に応じて点字や手話の授業を行っています。自身も聴覚障がいや視覚障がいのあるボランティア講師が、週に数回各学校を訪問し、放課後などの空き時間を利用して点字や手話を教えています。



ボランティアの講師から点字を学ぶエシエルさん
＝ハイバルパフトゥンハー州ハリプール郡で2025年2月

生まれつき視覚障がいがあるエシエル・ファティマさん（8歳）は当初、ご両親が、点字教材などがない普通学校で彼女が学ぶのは難しいと考え、特別支援学校への就学を検討していました。しかし、同校は家から遠すぎて通えず、その後、AARが自宅近くの学校で支援を始めたのを機に入学しました。教室では、視覚障がいのある講師のサポートの下、点字を使って学んでいます。「友だちと話したり、一緒に学校を探検したりするのが楽しい」と、素敵な笑顔を見せてくれます。

イスラマバード事務所
小柳勇人



解説

そもそも、インクルーシブ教育とは？

「インクルーシブ教育」(IE)とは、すべての子どもたちが、障がい、人種、性別、能力などによって排除されることなく教育を受ける権利を保障されるよう、地域の学校の文化や政策、実践を変えていくプロセスです。子どもたちは多様であるという前提と、一人ひとりが価値や可能性のある人間として等しく大切であるという信念に基づき、教育制度そのものを変革していくことが求められます。

国連教育科学文化機関(ユネスコ)は、IEは人々が共に生き、多様性が尊重されるインクルーシブな社会を促進すると述べています(2020*)。IEの推進は、AARが目指している、多様な人間が各々の個性と人間としての尊厳を保ちつつ共生できる社会の実現にもつながります。

AARは主に、子どもたちが障がいを理由に教育を

受ける機会から取り残されないよう活動していますが、それは、すべての子どもたちが、参加し、学び、成長できる学校づくりでもあります。児童・生徒、教員、家族、行政、地域住民などの関係者と共に考え、話し、実践することを繰り返しながら、現地の人々による取り組みを後押ししています。

※UNESCO. 2020. Global Education Monitoring Report 2020: Inclusion and education: All means all. Paris, UNESCO.



支援事業部プログラムマネージャー
兼佐賀事務所長
園田知子



災害支援

能登半島地震相談会開催

生活再建の悩み次々と

AARは能登半島地震及び大雨の被災者支援として、公的支援について弁護士らが解説する生活再建相談会を2024年2月より定期的に開催しています。

2月8・9日の二日間は、石川県輪島市の河原田公民館、南志見公民館、稲屋町第一仮設集会所、鳳至公民館の4カ所で開催し、計52人の住民の皆さんが参加しました。いづれも地震と大雨で大きな被害があった地域です。



制度の説明をする永野海弁護士＝輪島市立河原田公民館で
2025年2月9日

70歳代で一人暮らしの女性は「地震で家が半壊判定され、公費解体を申し込んだが、9月の大雨でその家が全て流され、改めて罹災判定を申請しようとしたら断われた。どうしてか分からない」と相談し、講師の弁護士は「公費解体を申請すると、被災した家は『非住家』扱いとなるため、罹災証明が出されないと考えられます」と説明しました。

また、50歳代の男性は「自宅が全壊判定され、仮設住宅を申し込んだ。自宅を修繕して住み続けたいが、応急修理制度は使えるか」と質問し、講師は「仮設住宅の申し込みをすると、応急修理制度は使えない可能性もあるので、確認が必要です」などとアドバイスしていました。

能登半島地震に大雨被害が重なって、行政の支援を受けるための手続きが非常に複雑になっており、住民の悩みは絶えません。AARは今後とも能登の被災者に寄り添い、個々の声をしっかり聞きながら支援を続けてまいります。

東日本大震災14年

福祉作業所にガス発電設備を提供

東日本大震災（2011年）の被災地で、AARは現在、インクルーシブな地域防災の普及、避難生活者や帰還住民の地域交流に力を入れています。このほど、福祉作業所を自主避難所とするモデル事業として、社会福祉法人「ひろせ福祉会」（福島県伊達市）が運営する生活介護事業所「さくら」に、プロパンガスで発電する設備を提供しました。

東日本大震災では、障がい者の死亡率は全住民平均値の2倍に上りました。避難時の要支援者のリスト作成や個別支援計画の策定が進んでいなかったこと、避難所では障がい者や高齢者に十分な対応ができなかったことなどが原因でした。昨今の被災地でも、障がい者と家族が半壊した自宅や車中泊での避難生活を余儀なくされる事例が見られます。

ひろせ福祉会の三浦正一理事長は「災害時はガソリンがなかなか手に入らないが、プロパンガスは



交流イベントで餃子づくりを楽しむ参加者
＝福島県川俣町で2025年2月20日

入手しやすい。電気があれば障がい者の自主避難先として施設が機能します」と話します。

また、原発事故の影響で全世帯が避難を強いられた福島県川俣町の山木屋地区では、2月20日に地域交流イベント「餃子パーティー」を開き、18人が参加しました。2017年の避難指示解除後に帰還した住民は震災前の3割に留まり、その多くが高齢者で、日頃からの交流が地域を守ることにもつながります。AARは2024年度、2月末までにこうした交流イベントを計259回開催し、のべ4416人が参加しました。

大船渡市山林火災 緊急支援

岩手県大船渡市で2025年2月26日から12日以上続いた山林火災では、市域の1割近くが消失し、ピーク時に4,000人超が避難するなど地域の暮らしに多大な影響を及ぼしました。

AARは、「いわてNPO災害支援ネットワーク」とともに、相談窓口を開設し、仮設住宅の入居や公的助成の申請手続き、心身のケアなど、直接の被災者および二次被害を受けた住民へ支援を実施します。

このたびの緊急募金に、多くの皆さまがご寄付をお寄せくださいました。ご協力に心より御礼申し上げます。



破壊された自宅前に立つユーリイさん（左）とAARのシュクル・バイデリ＝2025年2月

長引く戦争の中、困難に直面する人々の命を守るため、引き続きご支援をお願いいたします。

ユーリイさんは、「事態終息のためにロシアに領土の一部を与える以外にないように思えるが、ウクライナ人はそれを受け入れることができるだろうか」と自問するように語り、こう付け加えました。「孫たちに未来があることを願うばかりです」。

ロシアの軍事侵攻から3年。ウクライナでは今も戦闘が続く（3月12日時点）、多くの人々が困難な状況に置かれています。AARは南部ミコライウ州で障がい者世帯を支援しています。ユーリイさん（59歳）はミサイル攻撃で負傷し、右耳の聴力をほぼ失い、補聴器と杖が欠かせません。脚の痛みで常に痛み止めが必要で、支

給された杖も不具合が生じています。仮設テントで厳しい冬を耐えながら、「家を再建したいが、この身体では働けず、年金で細々と暮らすのがやっとです」と語ります。AARは現地団体と協力し、障がい者世帯185世帯に医薬品や歩行補助具を届けるとともに、医療施設にリハビリ機材を提供しています。

難民支援

ウクライナ人道危機3年 障がい者世帯を支援

スタッフ日記



ネコと暮らす国トルコ ～街角の小さな共生物語～

トルコ駐在員 宮地佳那子



トルコからメルハバ（こんにちは）！今回は、ネコにまつわるエピソードをお届けします。トルコでは、スーパーやカフェ、博物館など、至る所でネコがくつろいでいます。公共の場にはネコ用の寝床や餌場が用意され、人々が優しく見守る光景は街の一部となっています。

そんなネコたちが人間に「踏まれる」のでは？と心配になりますが、35年トルコに住んでいる同僚でさえ、そんな事件は1度しか見たことがないそう。ネコの敏捷さと人々の注意深さが生み出す共存関係なのでしょう。一方で、高い所から降りられなくなることはよくあります。ある日、消防車が出動し、木の上のネコを救助する場面に遭遇。私自身、過去に救出を手伝ったこともあります。木の枝から、私の頭と肩を伝って地面へ降りたネコが、感謝するように足元を回ったとき、「幸せて、こういうことなのか」と感じました。

ネコを巡っては、人間の紛争解決力も研ぎ澄まされます。先日、事務所が入るアパートの管理人に、「ネコにエサをあげると、虫がわいて迷惑」と苦情が入りました。ネコへの給餌は一般的ですが、不快に感じる人もいます。そこで管理人は給餌場所を少し移動させ、無事双方の理解を得ることに成功しました。人と動物が自然に共生する風景に、改めて心温まる思いがしました。

トルコではネコだけでなく、イヌも街や遺跡に溶け込み、共に暮らしています。動物好きのみなさん、ぜひトルコに遊びに来てください。



本屋の棚の上

博物館の展示にも

会議に参加しています

「ともにしあわせになるしあわせ」 神戸から発信

ファッション・生活雑貨などオリジナル商品の通信販売を手掛ける株式会社フェリシモ(神戸市中央区)は、環境保護や女性・子ども支援、災害支援をはじめとする社会貢献活動で知られ、AARも応援していただいています。阪神・淡路大震災(1995年)から30年、能登半島地震(2024年)から1年となった1月、矢崎和彦・代表取締役社長に同社が掲げる「ともにしあわせになるしあわせ」という価値観、社会貢献に取り組む意義などをお聞きしました。

(聞き手…東京事務局兼関西担当 中坪央暁)

阪神大震災後の神戸に本社移転

阪神大震災から1月17日で30年が経ちました。当時を振り返って、どんなことを思い出されますか。

兵庫県西宮市の自宅で震災に遭いましたが、幸い窓ガラスが割れた程度で家族も無事でした。大阪にあった本社にたどり着いて驚いたのは、全国のお客様からフェリシモを心配する電話やファクスがたくさん届いていたこと。時間が経つにつれて、「神戸の方々のために役立てて」と現金書留を送ってこられたり、「お釣りは義援金に」と購入額以上の金額を振り込まれたりする方がどんどん増えていきました。

私はお見舞いや御礼の手紙を書きながら、フェリシモとお客様の関係性が単なるモノの売り買いを越えた次元に移っていることに気付き、心が震える思いでした。この時の経験は私自身の生き方、会社の在り方を変える大きな転機になったと思っています。

この年の2月に神戸に本社と物流施設を移転する計画だったのですが、もちろん引越どころではありません。それでも、神戸に行かないという選択肢は私にはありませんでした。ある神戸の社長さんからは「神戸にフェリシモが存在することは復興の象徴になる。ぜひ来てください」という手紙をいただいて。社内にも異論はなく、むしろ「やってやろう」という意気込みが感じられました。結局9月に神戸に移転しました。

能登の被災地に「無水グッズ」提供

能登半島地震では、当会はドライシャンプーや体拭きウエットタオルなど製品のご提供、炊き出し資金の助成という形でお力添えいただきました。

私たちは阪神大震災の時、お客様から助けられた、支えていただいたという思いがあります。その経験を踏まえ、当社は何か起きた時は必ず対応するルールを設けています。能登の震災

ではAARさんにフェリシモ基金事務局から「何かできることはないですか」とご連絡し、速やかな支援につながって本当に良かったと思います。

2011年の東日本大震災の時は、まず被災地域のお客様にお見舞いのセーターなど、次いで避難所にも支援物資をお送りしました。当社の「毎月100円義援金」には最終的に総額4億円超の善意が寄せられましたが、次の段階で意識したのが被災地の経済的自立支援です。東北各地の商品を集めて販売する「メイド・イン・東北プロジェクト」を5月に開始したほか、震災で仕事を失った女性に就労の機会を提供する「東北花咲かお母さんプロジェクト」として、例えばTシャツにリボンを縫い付けて付加価値を付ける仕事をお願いするなどしました。

「しあわせな社会づくり」を实践

全社的な社会貢献の核となる理念はどんなことでしょうか。

フェリシモが掲げるコアバリューは「ともにしあわせになるしあわせ」です。幸せには2種類あって、ひとつは「相対的幸福」、もうひとつは「絶対的幸福」なんです。前者は勝ち負けに基づく他者との比較優位であって、ビジネスでも何でもそうですが、ひとりの勝者が幸福感を得るために多くの敗者を生みます。これに対して、後者は人と比べない「自分にとっての幸

せ」です。誰かの犠牲の上に成り立つ
幸せは本当の幸せとは言えませんが、
私たちは幸せを創り出すことも、そ
れを誰かに贈ることも受け取ることも
できます。フェリスモの仕事は、社会
に「しあわせ」を増やすこと、大人も
子どもも自分が本当に好きなものを見
付けて生きていける、そんな社会の
「器」を創ることだと考えています。

それを会社として実現するために、
私は「事業性」「獨創性」「社会性」
の同時実現という経営方針を掲げてき
ました。企業が収益を上げて存続して
いくための「事業性」、ユニークな価値
を創り出す「獨創性」、そして社会に
貢献する「社会性」のバランスのとれ
た融合こそが目指す姿です。この3つ
は切っても切れない関係にあります。

基金活動の緩やかな広がり

―当会はタジキスタンの障がい者と
家族の縫製訓練事業、ウクライナ人
道支援などの活動も応援していただ
いています。フェリスモには実にさま
ざまな分野の「基金」がありますね。

最初に創設したのは1990年の
「フェリスモの森基金」です。折から
地球温暖化など環境問題への関心が高
まっていた時期で、当社は環境を意識
した生活雑貨ブランド「ウォールデン
クラブ」を立ち上げていました。この
担当者から「お客様と一緒に植林事業
をしてはどうか」と提案があったんで

すね。「面白い」と思ったものの、当
初案は一口3000円ほどのご寄付を
募るものでした。そこで私は「一口
100円であるべく多くの方に参加し
てもらう」とアドバイスし、商品を
定期購入していただく際に月々100
円のご寄付をお願いする初めての「社会
貢献型商品」を作りました。すると、
わずか1カ月間で2万人のお客様に
ご賛同いただいたのです。

「私たちひとり一人は微力だが無力
ではない」ことを実感した出来事でした。
この基金付き商品がベースになっ
た「森基金」は、その後のフォーマッ
トになりました。もともと当社の商品
カタログはお客様の声を反映した双方
向型なので、ご意見を気軽に寄せ
いただける関係性があり、さまざまな
社会課題の中で「どんなことに基金を
使いたいか」という声をお聞きするう
ちに、分野が次々広がったのです。こ
れまでに「基金付き商品」「100円
基金」などを通じて善意をお寄せい
ただいた賛同者は約230万人（実人
数）、総額32億円以上に上ります。

「1000万人で未来を変える」

―当会のようなNGOとの連携にあ
たって、今後どのような関係を考え
ておられますか。

当社には災害の被災地や紛争地に
行って直接支援する仕組みはないの
で、現状では当社の基金から資金を



バングラデシュの子どもたちに「ハッピートイズ」のぬいぐるみを
届ける矢崎和彦社長＝2012年7月（同社撮影）

提供し、自分たちではできない現場の
支援活動に役立てていただいていま
す。それはそれで良いのですが、次の
段階を考えると、フェリスモが持つビ
ジネス上のさまざまな機能、あるいは
豊富なネットワークや情報を活用しな
がら、一緒にやれることはもっとある
のではないのでしょうか。

当社は昨年、「1000万人で未来
を変える」プロジェクトを打ち出しま
した。これは「新しい経済圏と社会シ
ステムづくり」を目指して、社員とお
客様、ビジネスパートナー、さまざま
な分野の専門家など、できるだけ多く
の方々と「ひとつのチーム」として広
くつながっていくという大きな運動
です。当社の商品をお買いにならなく
てもWEBからご参加いただけます。
今後10年かけて1000万人と緩やか

につながっておいで、何かあった時に
すぐ連携できる体制を目指します。

大好きな神戸に貢献し続けたい

―神戸のランドマーク「神戸ポルトタ
ワー」が昨春リニューアルされた際、
御社がプロデュースと運営を手掛け
られたとか。地元・神戸への深い愛情
を感じます。

神戸、大好きですね。ポルトタワ
ーの件は本業ではないけれど、2025年
は当社の創業60周年という記念の年で
もあり、社員の熱意に押されて取り組
むことになりました。そこで改めて主
観的・客観的に神戸を眺めてみて、
明治時代に国際的な輸入港として映
画、ジャズ、ゴルフなど「日本初」
の多様な文化を受け入れ、独特の地形
や歴史の積み重ねの中で、豊かな生活
文化を醸成してきた街だと思いました。

その豊かさは、世界遺産の京都や奈
良のように「目に見える」ものではな
く、住んでみないと分からないので、
それだけ奥が深いと言えます。神戸は
小学生の頃、家族で遊びに来た時に
見た光景が忘れられず、いつかここで仕事
をしたいと憧れていた街なんです。私
自身にもフェリスモの社風にも、神
戸はとても合っていると感じます。大
震災から奇跡の復興を遂げた神戸に
は、まだまだ発信できる魅力がありま
す。神戸をもっと面白くするために、
貢献し続けていきたいですね。

まるとプロジェクト募金 2025 募集のご案内

AAR が世界各地で実施する活動の資金を一括でご支援いただく「まるとプロジェクト募金」。2024 年度は、春と秋に募集したプロジェクトすべてに温かいご支援を賜りました。現在調整中の一部を除き、順調にプロジェクトを進めております。世界情勢が一層混迷を深める中、AAR の活動地から次々と届く支援を求める声に応えるために、今年度は新たに 7 つのプロジェクトへのご寄付を募ります。詳しい支援内容は、同封のパンフレットまたはホームページをご覧ください。お電話でもご説明いたします。お気軽にお問い合わせください。



お問い合わせ

きりゅう おんじょう

AAR 東京事務局 桐生、園城

TEL : 03-5423-4511 E-mail : info@aarjapan.gr.jp

書き損じハガキ・切手キャンペーン 引き続きのご協力をお願いします

ロヒンギャ難民の障がい者に車いすや歩行器などの補装具、リハビリテーションを提供するキャンペーンに、約1万7,000枚の切手・ハガキが寄せられています（3月14日時点）。心より感謝申し上げます。目標の7万枚には、まだ5万3,000枚が必要です。皆さまのお力をお貸しいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

募集期間：2025年4月30日まで

集めているもの：

- ①書き損じた年賀状・官製ハガキ
- ②未使用の年賀状・官製ハガキ
- ③未使用の切手

送付先：〒141-0021東京都品川区上大崎2-12-2ミズホビル7F AAR Japan 物品募集係

通常総会のご案内

2024 年度の活動報告・決算、および 2025 年度の事業計画・予算などについて報告・決議を行う通常総会を 6 月 28 日（土）午後開催いたします。議決権のある正会員の皆さまには、改めてご案内をお送りいたします。正会員ではない方もご参加いただけますので、ご希望の方は東京事務局までご連絡ください。

【日時】2025 年 6 月 28 日（土）13：00～15：30

【場所】AAR Japan 東京事務局 6 階交流スペース

2024 年冬募金

温かなご支援が寄せられました

11 月にお送りした冬募金のお願いに、のべ 1,770 人の皆さまより 2,045 万 4,994 円のご寄付をいただきました。温かいご支援に心より御礼申し上げます。地雷から人々の日常を守り、地雷で傷つけられた人々を支えるために、支援を続けてまいります。引き続きのお力添えをお願い申し上げます。



地雷回避教育を受けるアフガニスタンの子どもたち

災害被災者支援へのご寄付 ありがとうございます

2024 年 1 月に発生した能登半島地震、9 月の能登半島大雨への緊急支援にたくさんの個人、企業・団体の皆さまからご寄付をお寄せいただいております。個人情報に配慮し、100 万円以上のご寄付、または 100 万円相当以上の物品寄付をお寄せいただいた企業・団体のみご紹介させていただきます。

能登半島地震・大雨緊急支援

Audemars Piguet Foundation
for Common Good

ビーズ株式会社

UBS グループ

レンドリース・ジャパン株式会社

（2024 年 11 月 16 日～2025 年 2 月 15 日、五十音順）

トルコで故・宮崎淳さんの名前を冠した災害センター開設

AAR の職員で、2011 年のトルコ地震緊急支援中に亡くなった宮崎淳さん（当時 41 歳・大分県出身）の名前を冠した「宮崎淳災害調整センター（現地名 Atsushi Miyazaki AKOM）」がトルコのワン県に完成しました。

開設式には当会トルコ事務所の職員 2 人が出席。ワン大都市自治体共同首長のセダル氏、同ゼイダン氏のほか、地元 NGO や市民ら約 400 人が参加しました。セダル氏は「宮崎淳という名前には、2011 年の地震で亡くなったすべての人々を記憶していくという思いを託しています」と話しました。

センターの設置は、トルコの災害対応能力強化が目的です。バックアップ電源で機能する大会議場は、近隣県やイラン北西部での災害時の連絡拠点として機能するほか、防災教育や都市計画の研究もこのセンターで行われる予定です。



宮崎淳災害調整センターの入り口正面に設置された宮崎さんを記念するパネル

イベント報告

能登半島地震 1 年シンポジウムを開催



左上から時計回り、大星三千代さん、ファシリテーターを務めた AAR 事務局長の古川千晶、木谷昌平さん、AAR 生田目充

能登半島地震から 1 年を迎え、1 月 11 日、オンラインシンポジウム「誰も取り残さない復興～障がい者・外国人とともに」を開催し、能登をはじめ全国から多くの皆さんにご参加いただきました。

ゲスト登壇者には「ななお・なかのと就労支援センター」（石川県七尾市）の木谷昌平センター長、七尾市国際交流協会の大星三千代理事長を迎えて、地震発生直後から現場で直面した経験と課題を報告。障がい者や外国人居住者など、災害時に特別な配慮を必要とする人々を取り残さない地域復興や防災の取り組みについて、現地で活動してきた AAR 職員とともに活発な議論を交わしました。

木谷センター長は「今後も皆さまの気持ちを能登に向けていただけたら、明日も頑張れます」、大星理事長は「皆さまとの新たなつながりが私たちにとって大きな宝。お伝えしたことが今後の備えになれば」と締めくくり、「誰も取り残さない復興」への思いを全員で共有しました。

マンスリーサポーターの皆さまとの親睦会を開催

日頃のご支援への感謝を込めて、3 月 7 日にマンスリーサポーターの皆さまとの親睦会を開催し、48 名の皆さまがご参加くださいました。

堀江理事長のあいさつに続き、皆さまからのご寄付でどのような活動が実施できているか、担当者よりシリア事業とチャーマー事業を報告しました。歓談の間では、和やかな雰囲気の中、「AAR は緊急時の出動が早くて素晴らしい」「直接支援の話を聞ける場はありがたい」などの声が聞かれました。

20 年以上マンスリーサポーターを継続してくださっている方を表彰する「ありがとうセッション」では、表彰者のお二人より、「マンスリーサポーターをしていることで、普段知ることができないようなことも知ることができて大変感謝している」「困ったときはお互い様の気持ちでマンスリーサポーターを続けていきたい」とのお言葉をいただきました。皆さまからお伺いしたご意見を真摯に受け止め、今後の活動に活かしてまいります。



AAR 役職員と歓談する支援者の皆さま



支援事業部マネージャー 野際紗綾子
NOGIWA Sayako

困難な状況にある人たちが 一人でも多く笑顔になれば

ミャンマー、タジキスタンなどの海外支援事業を統括。
優しい笑顔からは想像できないほど、修羅場をくぐり
抜けてきたベテランです。その想いを聞きました。

— 支援の道に入ったきっかけは？

2001 年の米国同時多発テロです。大学卒業後、外資系金融機関に就職して東京にいましたが、そのニューヨーク支店は、航空機が突撃したワールド・トレード・センターの数ブロック先。当時、多くの同僚が働いており、本当に心配でした。その時から開発途上国の貧しい人々の暮らしや考え方を理解したいと思い、2005 年に大学院進学を決めると同時に AAR に入りました。

— 入職してからの印象は。

緊急支援の現場は衝撃的でした。私は 2008 年ミャンマーのサイクロン、2009 年のインドネシア・スマトラ沖地震、2010 年パキスタン洪水、2011 年の東日本大震災と続けて現場に赴きました。ミャンマーは死者約 14 万人の大災害でしたが、当初は国連も現地に入らず、直前にビザを取得していた私だけが現地入りできました。とりわけ



ミャンマーの障がい児世帯に緊急支援物資を配付
=2008 年

支援の届かない現場で障がい者が取り残されていた姿が忘れられません。

東日本大震災では発生 2 日後に現地に

入り、2 年間、東北事務所長を務めました。そこで痛感したのは、障がい者や経済的に恵まれない方々がより多くの被害を受け、復興から取り残されていく「累積的被害」が生じていること。これは今も大きな課題です。

— 無力感に襲われませんか？

東日本大震災支援から学んだのは、行政や他の団体との協力・調整の大切さです。作り上げたネットワークやご縁は、その後の能登半島地震などの支援でも生きています。課題や悩みをさらけ出すことで、いろんな人が助けてくれます。

— 仕事とプライベートの両立は？

ほぼ毎月ミャンマーに出張し、夜のオンライン会議も多いのですが、夫をはじめ娘と息子が「ママは大事な仕事をしている」と応援してくれるのがとても嬉しいし、励みです。夫の両親には「いつ子どもが遊びに行ってもいい」回数券をもらい、その気遣いに感謝の気持ちしかありません。家族旅行と大好物のヒレカツでリフレッシュしています。

— 今、伝えたいことは？

この会報を読んで下さっている方々に、関心を持っていただきありがとうございますと伝えたいです。世界では「忘れられた危機」となっている難民問題が多数あります。ウガンダ、スーダン、ミャンマー、レバノン……。一人でも多くの人が笑顔になれる社会を目指して、ベストを尽くしていきたいと思っています。

編集部より

紛争や災害、貧困に苦しむ国・地域では、障がいのある人々がより大きな困難に直面する現実がある半面、誰かが必ず彼らに寄り添い、献身的にサポートしていることにも気付かれます。私たちは常にそうした人々とつながり、手を差し伸べる存在であり続けたい——改めてそう感じます。

AAR News

2025 Spring No.490

次号は 2025 年 7 月上旬にお届け予定です。

特定非営利活動法人 難民を助ける会

〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-12-2 ミズホビル 7F

Tel.03-5423-4511 Fax.03-5423-4450

www.aarjapan.gr.jp



AAR Japan